

二〇二五年度 光塩女子学院中等科【2/4】

国語入試問題

二〇二五年二月四日（火）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(1) 23 は形式段落の番号です。

1 われわれは時間や場所についていつもだいたいの見当をつけることができます。専門的には時間についてだいたいの見当をつける能力は時間の見当識、場所について見当をつける能力は場所の見当識といえます。

2 人類は時計や暦こよみを発明してこのような見当をつける能力を道具に頼るようになり、その分その力を退化させていますが、それでも必要になればだいたいのことはわかります。

3 ところが脳※が損傷を受けると、時間の見当がつけられなくなることがあります。このような人は季節がわからず、冬であっても、夏です、と答えたりします。夏にそんな服着ますか？と本人のセーター姿を指摘しってきしても、すぐにはピンときません。

4 あるいは午前か午後かがはつきりしなくなることもあります。時間を尋ねると、朝の一時頃ころなのに、午後三時頃ころ、などと答えます。

5 一日二四時間のうち、だいたい今はどのあたりか、一月三〇せいじゅうひ(三十一)日のうち、だいたい今はどのあたりか、一年三六五日のうち、だいたい今はどのあたりか、などというおおよその見当がつかなくなるのです。

6 あるいは時間の経過がはつきりしなくなる場合もあります。

7 目が覚めると必ず、朝だ、と思ってしまう人がいました。たとえ昼寝ひるねの後でも、目が覚めると、朝ご飯を食べると言い張って奥おくさんを困らせるのです。

8 普通はあまり考えなくても、だいたいの見当がつきます。深い洞窟どうくつにこもって夜昼の情報を遮断※しんたんし、時計もなしで自由に暮らさせると、だいたい二四時間から二五時間の間くらいのリズムで寝起きねおきするようになる、という実験があります。脳にはおおよそ

一日のリズムを測る仕掛けしかけがあるのです。もう少し短い時間経過についてはいわゆる「腹時計」も結構役に立っています。

9 普段ふだんわれわれは、このような①内からの仕掛けと周囲からの情報を合わせて、だいたいの時間経過を判断しています。この判断が出来なくなると、一日の行動は(あ)キジユンを失い、まとまりを欠くものになってしまいます。

10 自分の居場所を知るのも大切な能力です。

11 この力も 1 地図や磁石や標識じしやく(言語)に頼るようになって、だんだん退化してはいますが、②大脳の基本的な能力のひとつです。

12 アフリカのブッシュマン[※]は獲物^{えもの}を追って時には二日も三日も草原の中を移動することがあるそうですが、ちゃんと自宅へ戻ってきます。別に2地図²を持っていてわけではありません。太陽や星の位置から東西南北を判断し、手掛かりになる地形や

(い) ジュモクなどを記憶^{きおく}することで頭の中にしつかり地図を作り上げているのです。

13 大脳損傷では街の中で自分がどこにいますのかまったくわからなくなり、自宅へも戻れなくなってしまうことがあります。建物は見えているのですが、見えているだけで、方向を知る手掛かりにならなくなってしまうのです。普通は別に考えるほどのこともなく、自転車屋があれば左へ曲がり、パン屋があれば右へ曲がり、内科医院の横に入り、という感じで歩いてゆきます。頭の中に地図が出来上がっていて、それに合わせて移動しているのです。この地図が壊れてしまうと、建物は建物としてしか見えず、方向や道順を判断する手掛かりとはならなくなってしまうのです。

14 東西南北の感覚も頭の中の地図を描く上で重要な助けになります。街に住んでいる場合は文字情報がいくらでもありますから、この感覚なしでも移動可能ですが、広い(う)ヘイゲンなど手掛かりが少ないところではどうしても必要です。この感覚は子供の時の記憶が重要です。今、南を向いているとします。そうすると、右手は西で、左手は東、背中が北になります。あたりまえですが、この判断がすぐ出来る人と、少し時間をかけなければ出来ない人があります。筆者などは後者で、しばらく考える必要があります。しばらく何を考えているかというと、子供の時に自宅の縁側に腰掛けて座っている自分を思い出しているのです。この時の正面が南で、左手が日が昇ってくる東の方、右手が日が沈む西の方と思い出し、だからこつちが西かなどと考えるので、時間がかかってしまいます。つまり、子供の頃にしっかりと焼き付けられた方向感覚を一回一回今の状況に重ねないと、判断が出来ないのです。地図を読むときも東西南北を考える時、③この種の翻訳をやっている自分に気がつきます。もちろんこんな面倒なことをしないで、見ただけで東西南北がわかる方がいいのですが、考え方の癖みたいなもので、今はあきらめています。もともとこのア手の能力がないのでしょうか。

15 筆者の仲間は案外います。3地図をみても仙台は東京の東北方向、などと考えられず、東京の上でちよつと右のほう、などと覚えている人たちがそうです。南半球のオーストラリアのことを、イギリスやアメリカでは「下のほう down under」と呼ぶのだそうです。

16 ま、いずれにしても、時間の見当がつけられ場所の見当もつけられるから、われわれは安心して暮らせています。おおげさに言えば、④時空間の広大な世界にしつかりと錨を下ろして自分という船を停泊させている、その錨みたくに自分の心を安定させ

る働きが見当識には備わっています。

17 大きな広がりの中で、正しく見当をつけるということの大切さは、時間や空間に限りません。自分がこれからやらなければならない問題の処理にこそ最もよく表れます。

18 たとえば何かの仕事を抱え込んだ時、だいたいこの程度のペースとこの程度の（え）シリヨウを読めばだいたいいけそうだ、という見当がうまくつけられて、たいしてあせらずに余裕で仕上げることの出来る人がいるかと思えば、その仕事にどれくらいのエネルギを注ぎ込めばよいのかまったく見当がつけられずに、というか見当をつけようとせず、こんなものすぐ出来るというたかをくくって遊びほうけ、間際になつてあせりまくって、結局何も出来ずに終わってしまう人もいます。試験でも、ここは先生がかなり熱を入れて授業していたな、大事なところに違いない、という見当がつく人と、つかない人がいます。授業の内容だけでなく、その重要さの程度を教師の態度と合わせて、大きな立場から眺められるから、見当がつくのです。

19 見当をつけるためには 4 地図が必要です。

20 ⑤地図は点ではなく、から出来ています。たくさん地点がそれぞれに関係を持っているのが地図です。仕事をどのくらいで仕上げるかという見当も、この試験ではどこが重要かという見当も、仕事にからむ周辺の知識、あるいはその試験についての授業全体の知識、つまり面の知識が作り上げられていないと、つけようがありません。

21 見当づけはヤマカンとは違います。ヤマカンは面の知識なしで、エイヤツと目的地点に達しようとするわけですから、うまくゆくわけがありません。たとえうまくいったとしても、その時かぎり後には何も残りません。

22 人生の節目節目で、われわれはいろいろな選択や決断を迫られますが、その決断も複数ある選択肢のどれでもいいや、箸の倒れた方向へ行こう、という選択や決断ではうまくゆきません。そんなやりかたは試験のヤマカンと一緒に。自分は何をしたいと思っているのか、どの程度のことをしたいと思っているのか、あるいは今選ぼうとしていることが自分の性格に合っているのかどうか、その方向を選べばその後の生活はどのような方向へ向かうのか、それで後悔しない方向なのかどうか、などということについてあらかじめある程度の考えを持っていないと、見当をつけられません。

23 見当をつける、というのは扱っている問題を一度手元から離して、遠い距離から眺め、他の問題とのかかわりがどうなっているのかという大枠を知ることです。全体像を掴むことです。英語ではパースペクティブと言います。日本には大局観という言葉があります。また、英語から輸入され、日本でも定着していることわざに、「木を見て森を見ず」というのがあります。あるいは「井

の中の蛙、大海を知らず」ともいいます。細部にこだわって見当をつけられない愚かな状態のことを笑っているのです。部分的な、狭い知識だけでは全体がどうなっているのかは判断出来ません。大きな立場から見ると、それまで見えていなかったことが見え、わからないこともわかるようになります。

(山鳥重『「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学』による)

※注 損傷：そこなわれ傷つくこと。

遮断：さえぎること。

ブッシュユマン：アフリカ南部の採集狩猟民族サン族、サン人。

錨：船を留めておくために水底にしずめるおもり。

ヤマカン：勘に頼って当てずっぽうすること。

問一 次の(1)～(3)の設問に答えなさい。

(1) (あ)～(え)のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) キジュン (い) ジュモク (う) ヘイゲン (え) シリヨウ

(2) —「手」のここでの意味として最もふさわしいものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

1 方法 2 種類 3 技量 4 労力

(3) —「イ」たかをくくって」とありますが、「たかをくくる」の意味として最もふさわしいものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

1 誤解する 2 無視する 3 見くびる 4 信じる

問二 —①「内からの仕掛けと周囲からの情報を合わせて、だいたいの時間経過を判断しています」とありますが、「内からの仕掛け」と「周囲からの情報」とはどのようなものですか。「内からの仕掛け」・「周囲からの情報」のそれぞれにあてはまるものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。(答えは一つとは限りません。)

ア 腕時計 イ 外の明るさ ウ 腹時計 エ 洞窟の地形 オ 脳の働き

問三 —②「脳の基本的な能力」として本文中で挙げられている能力を二つ答えなさい。

問四 — ③ 「この種の翻訳」についての設問です。翻訳とは、ある言語で表現された言葉を他の言語に移し変えて表すことですが、ここではどのようにすることですか。四十字程度で答えなさい。

問五 [14] 段落の特徴の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者個人の感覚に引き付けて、わかりやすく説明している。
- イ 身近な具体例を挙げて、読者への問いかけをつらねている。
- ウ 人から聞いた話を用いて、筆者の主張の根拠としている。
- エ 音や様子を表す言葉を用いて、ていねいに説明している。

問六 — ④ 「時空間の広大な世界にしっかりと錨を下ろして自分という船を停泊させている」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 時計の見方や地図を理解し、自分の居場所が理解できるようになるということ。
- イ 自分のいる時間や場所にとらわれることなく、一つのことに集中できるということ。
- ウ 自分のいる場所や時間を把握し、自分の存在を確かなものとして保てるということ。
- エ 広大な空間の中で、自分と同じ時間や場所の感覚を持つ仲間と出会えるということ。

問七 [17] 段落の役割の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア [1] 段落から [16] 段落の内容を否定し、別の考えを提示している。
- イ [1] 段落から [16] 段落の内容をまとめ、繰り返し強調している。
- ウ [1] 段落から [16] 段落の内容を確認し、例をあげて検証している。
- エ [1] 段落から [16] 段落の内容をふまえ、論を発展させている。

問八 1と4の「地図」のうち、他の三つと異なる意味で用いられている「地図」を一つ選び、番号で答えなさい。

問九 ⑤「地図は点ではなく、☐から出来ています」の☐にあてはまる漢字一字の言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問十 次の文章は、☐23段落についての解説文です。読んで後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

・「井の中の蛙、大海を知らず」ということわざは、井戸のような小さな世界で過ごす蛙は海のような大きな世界を知ることがないことを表している。また、「木を見て森を見ず」ということわざは、部分である木を見てばかりいたら、☐Ⅰ(二字)としての森を認識できないということを表している。どちらも見識が☐Ⅱ(二字)ことを戒める言葉である。

「見当をつける」というのは、目の前にある問題を一度手元から離して遠い距離から眺め、他の問題との☐Ⅲ(四字)がどうなっているのかという大枠を知ることである。二つのことわざを用いて、「細部にこだわることなく☐Ⅳ(五字)から見ることが大事だ」という筆者の考えをわかりやすく説明している。

(1) ☐Ⅰ～☐Ⅳにあてはまる言葉を、それぞれ指定した字数で☐23段落中から抜き出して答えなさい。

(2) 「見当をつける」ことにより、「それまで見えていなかったことが見え、わからないこともわかるようになる」つたという例として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 歴史の年表をただ眺めているだけでは年号が覚えられなかったが、時代ごとに分けて細かい一つ一つの項目を繰り返し唱えていたら覚えられた。

イ 学園祭でクラスの出し物の案が思い浮かばず悩んでいたが、学園祭の学校テーマをもう一度よく考えたら、何をしたらよいか思い付いた。

ウ 合唱の練習中にどうしてもとなりのパートにつられてしまっていたが、となりのパートをあえて意識して聞くようにしたら、つられなくなった。

エ 苦手な料理がありこれまで食べられずにいたが、使われているものや入っているものがわかったら、安心しておいしく食べられるようになった。

〔三〕 次の文章は、筆者が「Kさん」からの手紙に答えるかたちで書いたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

Kさん、お手紙嬉しかった。この頃わからないことがいっぱいとおっしゃる。

今のあなたと同じ年齢の頃、私もわからないことだらけで、でも年をとったら、いろいろなことがわかるに違いないと思っていました。ところが、七〇代に入っても、この期待は、裏切られ続けています。わからないことは減るどころか、ますます増えていて、中でもこのところ、いつそう気になってきていることの一つは「自信」ということばの意味です。「自信がある」とか「ない」とかのあの「自信」、「自信を持ちなさい」と言うときのあの「自信」です。このことばに私は年を追うごとに違和感を覚え、距離を覚え、ここ一〇年余りついに自分とは無縁のことばと思うようになっていくのです。「自信をお持ちでしょう」と他人に言われるたびに、はて、自分に自信があつたことなどあるだろうかと考え、少なくとも（あ）物心ついて一度だつて自信があつたことなどなかった、と繰り返し思い至った挙げ句のことです。

とはいうものの、四〇年をこす教師生活の間には、若い人たちに向かって「自信を持ちなさい」と幾度かは言っています。①でも、言ってしまった後のあのしらけた、むなしい気持ちは今も忘れません。

「自信」とはいつたい何なのか。いよいよ気になった私は、つい先日、大小いく冊かの国語辞典を引いてみました。そんなに長い間気になっていたなら、なぜもつと早く引かなかったのか、と言われそうですね。言われてみれば、確かに、とは思うものの、煮詰まってからでなくては、この定義をしかと定義として受け取ることができなかったかもしれない、今は思います。これは言い訳かな？

それはともかく、『広辞苑』（岩波書店）や『大辞林』（三省堂）から始まって、「自信」ということばを引き始めた私は、最後に残しておいたいちばんよく使う『新明解国語辞典』（三省堂）を引いて、思わずXをたたいて笑いだしてしまいました。「そうか。まさにこれだ!!」、「よくぞ言ってくれた!」と思つたのです。そこにはこう記してありました。

「確かにうまくやることが出来る（た）であろうという自己評価」（第四版第一刷、一九八九年一月一〇日発行）。続いて、同じ辞典の第六版第一刷（二〇〇五年一月一〇日発行）を引けば「そのことをまちがいに、うまくやることが出来るという自己評価」と、さらにすっきりと明解になった定義が記されています。

（中略）『新明解…』がすてきなところは、「自分の才能・価値を信ずること。自分自身を信ずる心」（『大辞林』）とか「自分の能力や価値を確信すること。自分の正しさを信じて疑わない心」（『広辞苑』）などにある「信じる」という曖昧なことばから全く自由

になつて「自己評価」ということばをきつぱりと打ち出しているところだ。

②「これでなぞが解けた！」と私は思いました。なぜこのことばが年々、自分には縁のないことばとして遠ざかつていつていたか。なぜ、自信なんて、あつてもなくてもどうでもいい。いやむしろ邪魔かもしれない、と思うようになってきていたか。もつと言えは私は「自信」なんてくそくらえ！」とさえ言いたくなつてきていたのです。

私は長い教師生活の中で、自信が持てないと嘆く若い人たちに、いやというほど会つてきました。一方では、自信満々の人たちにもまた。たとえば外国語が周りの人よりうまく話せたり、いわゆる「容姿端麗」だったり。あるいはある(い)分野の事情に他人より通じていたり。ところが自信が持てないという人だけでなく、自信満々キャンパスを闊歩する人も、③実はいつも不安を抱えていることに、私は次第々々に気付くようになりました。自信がない、という人も、何かが他人よりできるようになつたとたん、自信を手にするのですが、手にすればしたで、またそれをいつか失うのではないかという不安にどうやら若者たちは取り憑かれてしまうようなのです。いいえ、若い人たちだけではない。四〇代、五〇代になつてもそういう不安を抱え続ける人に、私は大勢会つてきました。何かが、他人よりできれば自信が持てて、できなければ自信が持てない。その時の「自信」って何なのだろう。そんなに「自信」のあるなしで振り回されるなら、いつそ自信などと縁を切つてしまつてもいいのでは？ 私には、「自信」が人を幸福にするとは、次第に思えなくなつてきていました。

でも、「自信」を持つのはいいこと。必要なこと。そういう声はいたるところで聞かれるのに、「自信」に疑義をはさむ声には、なかなか出会えません。それで、ようやく、いえ、ついに辞書を引く氣になつたのでした。

いや、「自己評価」には参りました。脱帽です。これで納得がいききました。自信がある、と自ら言う人、あるいは自他共に認める人が、なぜ周囲の人々を幸福にするのを、見たことがなく、むしろ目に入る風景といえは、周囲の人々を見下しているように感じられる場合がほとんどだったかということが。なぜ、そういう人にアグレッシブなものを常に感じざるを得なかったかということが。にもかかわらず、いえ、だからでしょうか、前にも記したようにそういう人々に常に不安の影を見てとらずにはいられなかったことが。そうです。「自己評価」に何の価値がありません。もちろん他人による評価にも、ですが。

学校というところは、いつも何ができるか、できないかで評価されるところです。社会もおおむね、そうです。いえ、できるか、できないかだけならまだいいのですが、そこに「他人と比べて」が入ります。他人と比べて少しでも何かが優れていると見るや、自信＝自己評価は高くなり、劣つていると感じると、自信はたちまちしほみ、自己評価は低くなります。④そんな自信つて、持つ

必要があるのでしょうか。そんなものに振り回されてしまうなんて、愚かとは思いませんか？

などと偉そうなことを言っていました。実は私自身、この問題で振り回されそうになったことがあるのです。自信とはまるで縁なく生きてきたはずだったのに。

それは三〇代の初めに私の書いた評論がある「新人賞」をいただいた時でした。驚いたことに、そのとたん、その分野の全国誌から原稿依頼が舞い込むようになりました。それまでは、東京の研究会などに出ても、誰からも声をかけられることなどなかったのに、先生と呼ばれる有名な人々からさえ声をかけられるようになりました。私は周りの空気が変わったのを感じました。

⑤あぶない、と思いました。このままいくと、外からの評価にやられてしまう、と思ったのです。私は必死に自分に言い聞かせました。「受賞する前と後でおまえの書いたものが変わったわけではないのだよ」と。賞をいただくまいと、書いたものは全く変わらず、ただただそこにあるのです。私自身だって、同じでした。受賞したからといって立派になどなるわけではない。私は書かずにいられたことを書いただけで、昨日と同じ自分がそこにいるだけでした。変わったのは私をとりまく外側の世界だったのです。それも全体からみればごく限られた人たちのさらにほんの一部が——もしかしたら、その人たちのどうでもいい一部だけが——（う）ハリの先ほど変わっただけかもしれないのです。そんなものに自信を与えられたり、奪われたり……。今思えば、私はあの時、ばかばかしい、といよいよはつきり思ったのかもしれない。その時かぎりの無責任な評価なんて少しも本質的なものじゃない。そんなものに、左右される⑥「自信」もまた、と。

（中略）

さて、⑦長い間、若い人たちと多くの時を過ごしてきて、私が願ってきたこと。それは自信のあるなし、自己評価の高い低いはどうでもいいけれど、——だってそれは時間のものさしで測っても、空間のものさしで測っても、一喜一憂すべきものではないのですから——まずは、自分自身を無条件に肯定できるようになってほしい、ということでした。あるがままの自分を好きになってほしいということでした。いえ、好きにまでならなくてもいい。まあ、仕方ない、こんな自分でも受け容れてやるか、ということころまでくれば、しめたもの。そう願ってきました。それは、自分に見切りをつけることではありません。それどころか、まるごとの自分と向き合い、まるごとの自分を引き受けて、その自分をしっかり生きてやること。そうです。誰もかわりにあなたの人生を生きてやることはできないのですから、あなたが生きるしかない。自分がどれほど、おバカさんに見えても、あなた自身を生きてやつてほしい。そう切に願います。私は既存の宗教のどれにも、まだ身をゆだねることができないでいる者ですが、それでも思うので

す。もし神がいるとして、その神があなたを愛し、生きてごらんと言ってくれているのに、自ら、その神の手を払いのけるのは傲慢ではないかと。

そうです。生きてごらん、と言ってくれているのです。宇宙は、世界は。人々が遠い昔から生み出してきたたくさんの絵も、音楽も、物語も。そこに自信なんてありません。そんなのは、あつたつて吹けば飛ぶようなものです。世界を信頼して自らをゆだねればよい。自分で自分を評価する必要もないし、外からの評価に「一喜一憂」する必要もない。繰り返になりますが、自分をまるごと受け容れ、丁寧に、省エネしないで、つまりは手を抜かずに、生きてやる、それしかないように思います。そのとき「自信」は何の意味もなくなるに違いありません。

どうか、お元気で。またひよいと遊びにきてください。待っています。

(清水真砂子『大人になるっておもしろい?』による)

※注 挙げ句……した末に。 煮詰まつて……考えが出つくして。 しかと……しつかりと。 端麗……整っていて美しいこと。 キャンパス……大学の敷地。

闊歩する……堂々と歩くこと。 疑義……うたがひ。 脱帽……感服すること。 アグレッシブ……攻撃的な。 傲慢……おごりたかぶって人を見下すこと。

問一 次の(1)・(2)の設問に答えなさい。

(1) (あ) (う) について、(あ)・(い) の漢字の読みをひらがなで書き、(う) のカタカナを漢字に直して書きなさい。

(あ) 物心 (い) 分野 (う) ハリ

(2) 「一喜一憂」のように、漢数字を使った次の四字熟語について、**A**・**B**にあてはまる漢数字の組み合わせとして正しいものを

後のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 朝**A**暮**B**……目先の違いにとらわれて結果が同じことに気がつかないこと。

ア (A 一・B 四) イ (A 三・B 四) ウ (A 四・B 四) エ (A 五・B 四)

2 **A**騎当**B**……並はずれた技術や経験のあること。

ア (A 一・B 二) イ (A 一・B 十) ウ (A 一・B 百) エ (A 一・B 千)

問二——①「でも、言ってしまった後のあのしらけた、むなしい気持ちを今も忘れません」とありますが、筆者はなぜ「しらけた、むなしい気持ち」になったのですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、「自信」とは何なのか自身にもわからず、このことばに違和感を持っていたため。

イ 筆者は、誰もが身につけるべき「自信」を、自分自身はまだ身につけていないと思っていたため。

ウ 筆者は、「自信を持ちなさい」という言葉が、生徒に共感されないことを不満に思っていたため。

エ 筆者は、人が「自信」を持つためには努力が必要で、簡単ではないことを分かっていたため。

問三——②「これでなぞが解けた!」と私は思いました」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 筆者の考えによると、「なぞ」とはどのようなことですか。「なぞ」の内容としてふさわしいものには○、ふさわしくないものには×を書きなさい。

ア なぜ、「自信」が筆者にとつて縁のないものであり、邪魔なものであると感じられるようになったのかということ。

イ なぜ、「自信」は人々を幸福にするものののに、人々は「自信」をつけることを簡単にあきらめてしまうのかということ。

ウ なぜ、「自信」があると自分で言う人々の多くが、周りの人を見下す態度をとっているように見えるのかということ。

エ なぜ、「自信」のない人だけでなく「自信」があることを自他共に認める人でも、常に不安そうに見えるのかということ。

(2) この部分に関する次の解説文を完成させなさい。なお、**X**は【選択肢】のア～エから選び、**Y**は本文中から四字で抜き出しなさい。

・筆者は「なぞが解けた」ときの気持ちを、——「思わず**X**をたたいて笑いだしてしまいました」と表現している。**X**をたたくは、「はつと思ったり感心したりすること」という意味の「**X**を打つ」という慣用句を踏まえた表現であると考えられる。筆者がこのように反応するのは、辞書を引き「自信」について考える中で、『新明解国語辞典』の説明によつて「自信」とは

「**Y**(四字)」に過ぎず、価値がないのだと、強く納得したからである。

【選択肢】**X**…ア 手 イ 膝 ウ 肩 エ 額

問四 — ③「実はいつも不安を抱^かえている」とありますが、ここでの「不安」とはどのような不安ですか。本文中の言葉を使い、「不安。」に続くように、三十字程度で書きなさい。

問五 — ④「そんな自信」とは何を指しますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 他人と比較^{ひかく}しても決してゆるがない、絶対的な自信。
イ 物事の比較^{ひかく}によつて常に不安を解消してくれる自信。
ウ 物事の比較^{ひかく}から自己評価を厳^{きび}しくさせてしまう自信。
エ 他人との比較^{ひかく}によつて不安定に変化してしまう自信。

問六 — ⑤「あぶない、と思いました」とありますが、筆者はなぜ「あぶない」と感じたのですか。それを説明した次の文中の

A C にあてはまる言葉を、それぞれ指定した字数で本文中から抜き出して答えなさい。

・自分自身も自分の A (五字) も、受賞前とは全く変わっていない。それなのに、受賞をきっかけに B (六字) が変わったことで C (二字) になったと錯覚^{さくかく}しそうになったから。

問七 — ⑥『自信』もまた、とありますが、この後に補う内容として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ごく限られたものである。 イ ばかばかしいものである。 ウ 立派なものではない。 エ 本質的なものではない。

問八 — ⑦「長い間、若い人たちと多くの時を過ごしてきて、私が願ってきたこと」とありますが、筆者の願いとはどのようなことですか。また、それを受けとめ、あなた自身はどのように考えますか。あわせて百字以内で書きなさい。

「問題は以上です」